

集落に生きる空間

—西後入東の谷での暮らし—

1200166 大和 敦子

指導教員 渡辺 菊真

1. 背景と目的

西後入は高知県香美市土佐山田町佐岡地区にある集落である。西後入にある東の谷という場所にはじめて訪れた時、山水の美しさや地形によって造られた風景、住民の温かさに感動した。また、集落の人々から「若者不足で活気がなくなっていくことに寂しさを感じている」という話を聞き、何か、建築を通してできることはないかと思うようになった。そこで、西後入東の谷に通い続け、建築を通して何ができるのかを提示したいと考えた。

2. 調査からみる西後入

2-0. 調査について

西後入東の谷に日々通い続け、些細な環境の変化、住民と場所との関係性を自分の目で見、住民から話を聞くことで把握するようにした。調査期間は10月23日～12月30日である。なお、自分の立場は、東の谷に定住することを前提にしている。

2-1. 東の谷

東の谷は、周りが山に囲まれており、すり鉢状の地形になっている。そのため、昔から周りの山を見て天気を予測していたそうだ。また、大谷川をはじめ、水に恵まれている。大谷川は、中の谷から東の谷と大後入の間を通るように流れている。雨天時には、この川から大量の霧が発生し、酷い時には西後入が見えなくなってしまうほどである。

以下、東の谷で見つけた各所の魅力について紹介する。

① 竈戸神社



かつては、竈戸神社がある辺りまで一面、田が広がっていた。その後、

過疎化により植林が行われ現在に至る。この神社では年に2回祭りが行われ、東ノ谷以外の人々も集まる。この地にはイチヨウやもみじの木が植えられており、紅葉期は非常に美しい。

② 棚田が生み出す風景



竈戸神社へ向かう際に広がる棚田の美しい大風景。扇状に広がる棚田地形には、かつて人も住んでいたが、冬には北風が吹き厳しい環境である。現在は誰一人住んでいない。

③ 骨組みの見える農機具小屋



西後入の主要道路にある農機具小屋。別道から見ると屋根がはがれ骨組みが露出している。一見、壊れかけた建築物にしか見えないが、骨組みが様々な場所から見えることで一種のランドマークになっていると思われる。

④ 戦時の痕跡—防空壕—



第二次世界大戦で実際に使用されていた防空壕。現在は電気を通して生姜や薩摩芋などの保管庫として利用されている。写真の防空壕は小野川家のものである。防空壕内は鉱石によって輝き、不思議な魅力がある。

⑤ 索道跡



西後入は川の恵みを活かし、農業で栄えていた。住民は、東の谷だけでなく、西後入の各地に土地をもち作物を作っていたらしい。当時は、車がなかったことから、索道機によって、作物を運搬していたそうだ。車の発達後、索道機は使用されなくなり、現在

は、索道機のあった小屋のみが残る。

⑥ 阿弥陀堂



阿弥陀堂は阿弥陀様を祭ったお堂であり、元は現在のお堂よりも大きかったそうだ。1月15日には阿弥陀如来のお祭りをしていた。また、年に2回、ここでは除草作業が行われる。除草作業前と後では眺めることのできる風景が驚くほど異なる。

⑦ 旧道門—巨岩—



昔も今も変わらず使い続けられている旧道沿いの東の谷集落入口に、巨岩がある。門守神的存在であり、事実、仏が刻まれている。

3. 設計

3-1. 私の建築

まず、設計の第一段階として自分自身の住処とアトリエの設計を行う。

3-1-1. 住処の選定敷地

東の谷に住むということ考えた時、集落から程よい距離感を保ちたいと考えた。また、自分というよそ者がただ入るのではなく、自分が住むことで集落に何かメリットがある方がよいと考えた。そこで敷地は棚田地形に残る利用されなくなったビニールハウスのある場所を選定した。ここは畑としての役目を終えた後もビニールハウスの回収がされないまま放置されていた。調査の際にはごみなども捨てられており、荒地となっていた。一方、この場所の裏側、草むらをかき分けた先には、道路工事のために山が削られ、ぽっかりと空いた空間が造り出されていた。ネガティブな周辺環境は改善しつつ、工事でできた空地を楽しめるようにしたいと考えた。(図4)

3-1-2. 住処の設計

棚田地形による段差を活かし、住宅の2階部分が浮いて見えるような設計をした。また、集落の人の話から、常に行動を把握されていることを知りプライベートがあまりないと感じた。しかし、東の谷に通ううちに、見守られているという感覚に変化したため、住宅を壁で仕切ってしまうことを極力やめ、プライベート空間が曖昧な住宅にした。(図1)

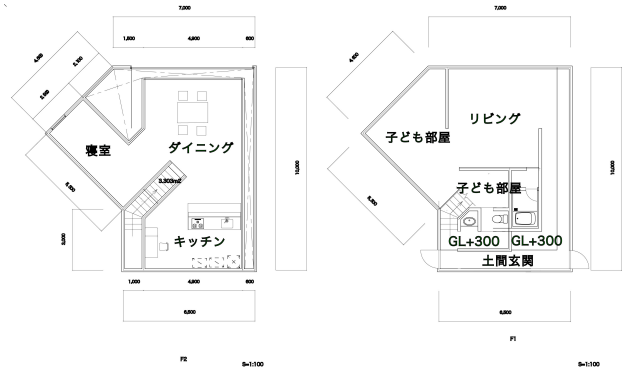


図1

3-1-3. アトリエの敷地選定

アトリエは、クライアントが訪問してくるので、彼らに東の谷の魅力を伝えるために活用できると考えた。また、棚田地形の迫力ある風景を感じながら、自然の中で設計業がしたかった。このことから選んだ場所は、竈戸神社へ向かう途中にある小さな敷地を選んだ。この場所は、大後入から西後入へ向かう際の入口が見える場所であり、棚田の風景を楽しめる場所である。

次に、骨組みの見える小屋は、西後入の主要道路沿いにあることから、人に見られる機会が多いと考えた。また、雨の日には小屋脇の水路に沢蟹があつまりその様子を覗くことができる。このことから、骨組みの見える小屋も活用して、面白い建築を発信できる場所にしたいと考えた。

3-1-4 アトリエの設計

アトリエからは、棚田の風景を近距離、遠距離で楽しむように計画した。棚田の大風景は建物内から堪能するよりも、そのものを堪能してほしいと考えた。したがって、玄関位置を、棚田風景が最も堪能できる位置に配置し、訪問者を誘導できるように計画した。次に、アトリエ内からは棚田に生えたススキが風に吹かれ揺れている様子や、太陽に照らされて輝いている様子を堪能できるように計画した。また、アトリエとしての敷地としては十分な広さが確保できないことから地下の設計スペースを計画、骨組みのみ見える小屋からもアトリエに

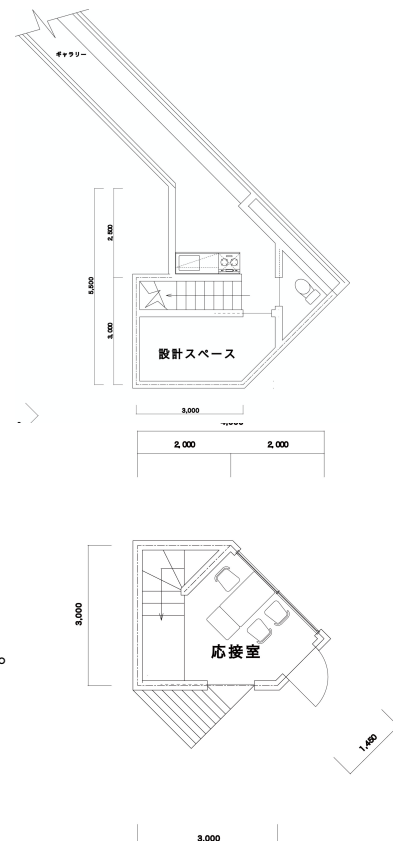


図2

向かうことができるようにした。骨組みの見える小屋は住民のたまり場となるように設計し、アトリエまでの道線はギャラリーとした。(図2)

3-2. 村の建築

次に、建築をとおして、西後入の人のためになる公共物の設計(村の建築)を行うこととした。

3-2-1. 塔の選定敷地

大後入から西後入へ向かう道から、西後入東の谷を見ることができ、時に発生する霧で見え隠れする風景を建築によって強調したいと考えた。従って、大後入からみえる位置でなければならない。次に、調査で見つけた魅力的空間の中で、活用することでより魅力を発揮するであろう防空壕、索道跡地も活用したいと考えた。そこで、選定した敷地は墓山の上の索道跡地の隣の敷地とした。

3-2-2. 塔のある風景計画

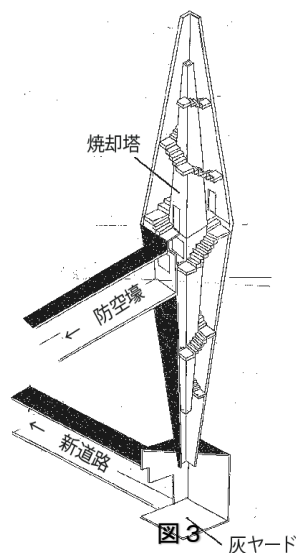
東の谷について、外部のほとんどの人が存在を知らない。自分自身が建築を通してできることを考えた時、風景の魅力を加速させる建築をつくることだと思った。そこで考えたのが塔である。霧によって見え隠れする塔により、人は塔に興味をもつと共に東の谷を塔のある集落として認識し始める。

3-2-3. 塔の設計

塔は住民に活気をもたらす愛着ある建築であるべきと考え設計を行った。(図3)

① 日常空間としての塔計画

二重につくられた塔からは、空のみに焦点が当たるように計画した。すり鉢状という地形からみる空は、一枚の切り取られた写真の様であり、日々違う風景を見せてくれる。そんな空に焦点を当てた。空をのぞむ



② 非日常空間としての計画

日々の調査から、住民は「行事」を人が集まるきっかけとして考えており、楽しみにしていることが分かった。また、集落の除草作業に参加した際、燃やす場所がなく、山奥まで捨てに行っていた。これらの経験から、塔に、草木を燃やす機能を加えた。

③ 防空壕、索道跡地の活用

現在は活用されていないが、魅力ある空間として防空壕、索道跡地があり、これらを活用することでかつての活気を想起させることを考えた。そこで、塔までの雑草運搬を索道で行えるように計画した。現在ある索道小屋に加え、一か所新たに索道小屋を計画した。また、塔で焼却された燃えカスが灰となり地下(灰ヤード)へ落ちる仕組みを導入した。防空壕からは、燃えカスが落ちてく一瞬の様子を眺めることができる。また、落ちた灰は現在工事が進んでいる西後入の新道路からとることができ、作物の肥料として活用できる。

4. まとめ

「私の建築」によって、棚田や農機具小屋の魅力を伝える場をつくることができた。

「村の建築」では、塔を設計することで存在があまり知られていない東の谷を「塔のある集落」として認識させ、足を踏み入れるきっかけを作ることができた。また、塔自身の持つ空間と機能(除草、草木運搬、灰の利用)は住民を集めるきっかけとなり東の谷を活気づけることができるであろう。

私は建築によって、無理に誰かが住み続けるようになることを望んではいない。西後入のように、地方のいつ途絶えてしまうかわからない場所で、建築を通して見つけた魅力と共に住むと決意した人達がいなくなるその時まで、活気を与え続けたいだけである。そして、誰もいなくなった後も建築は痕跡として残り続けて欲しい。

塔は、西後入東の谷の風景として、そして『塔のある村』として時代を超えてありつづけるのではないだろう。

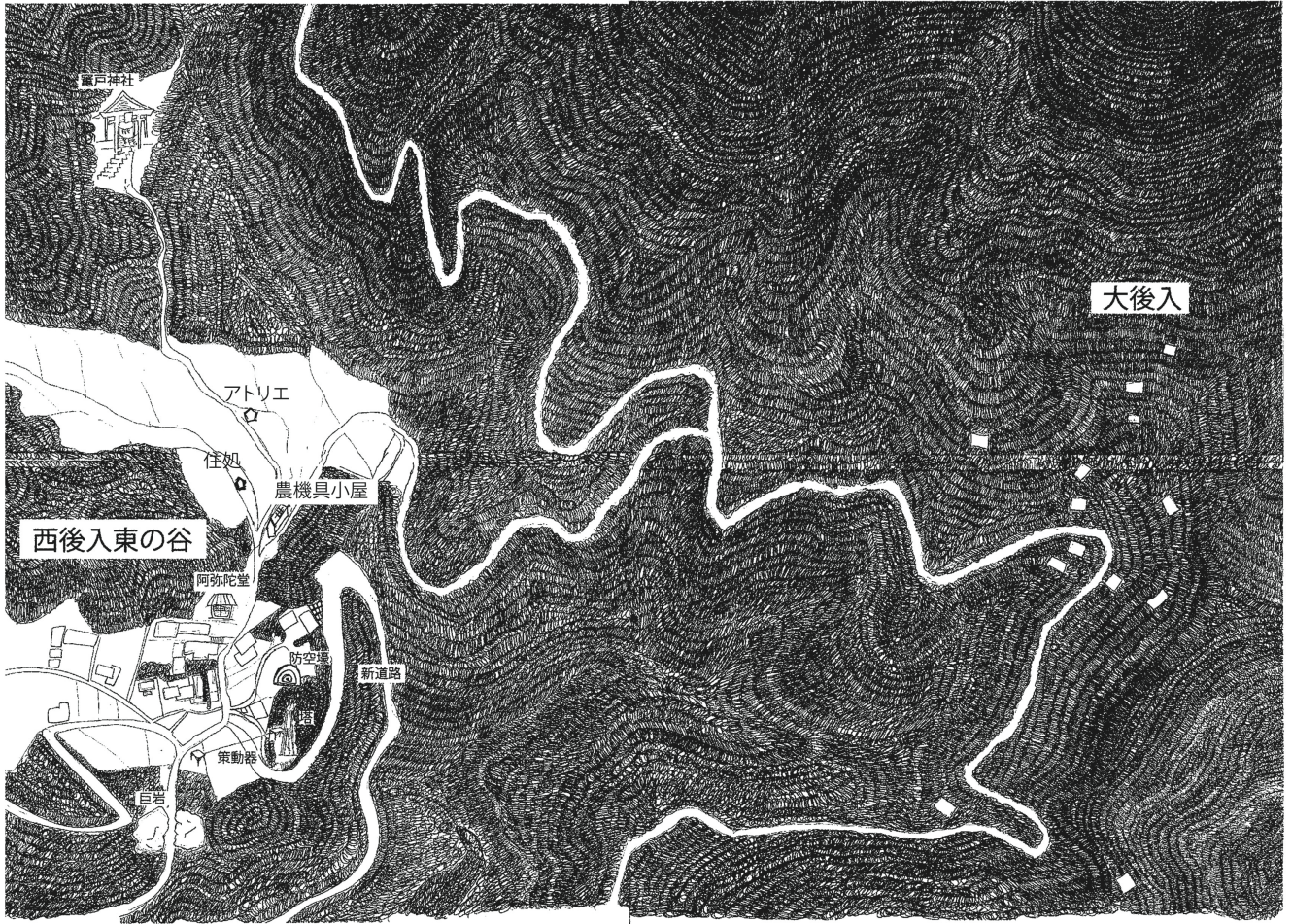


図 4

参考文献

西後入聞き取りレポート

作成者 楠瀬慶太